

PROGRAM NOTE

解説

奥平 一

作曲家・安部幸明（1911～2006・明治44～平成18）の作曲に於ける主な業績は、弦楽四重奏曲15曲、交響曲3曲、協奏曲1曲などである。生前の1960年前後には管弦楽作品の作曲家として、また晩年は室内楽作品、ことに弦楽四重奏曲の作曲家として著名な存在であった。作曲家・芥川也寸志（1925～1989）は、安部を大切にすべき日本の先輩作曲家のひとりとして認識していたし、安部の作品の指揮もしている。

管弦楽作品の演奏は国内やソ連、米国などで行われ、室内楽分野において特記すべき演奏は、2000年前後に行われた、NHK交響楽団の齊藤真知亜、大林修子、井野邊大輔、藤森亮一が組織する流亜風（るあふ）弦楽四重奏団による、安部の弦楽四重奏曲連続演奏会である。

しかし現在まで、安部の管弦楽作品のみによる演奏会は開催されたことがない。管弦楽作品のうち、現在CDなどで聴くことができる作品は三曲あるが、その他の作品は一般に録音が残されていない。今日の演奏会は、初演となる「オーケストラのための交響的スケルツォ」をはじめ、普段聴くことのできない、作曲家が28歳から73歳までの作品をプログラミングした。

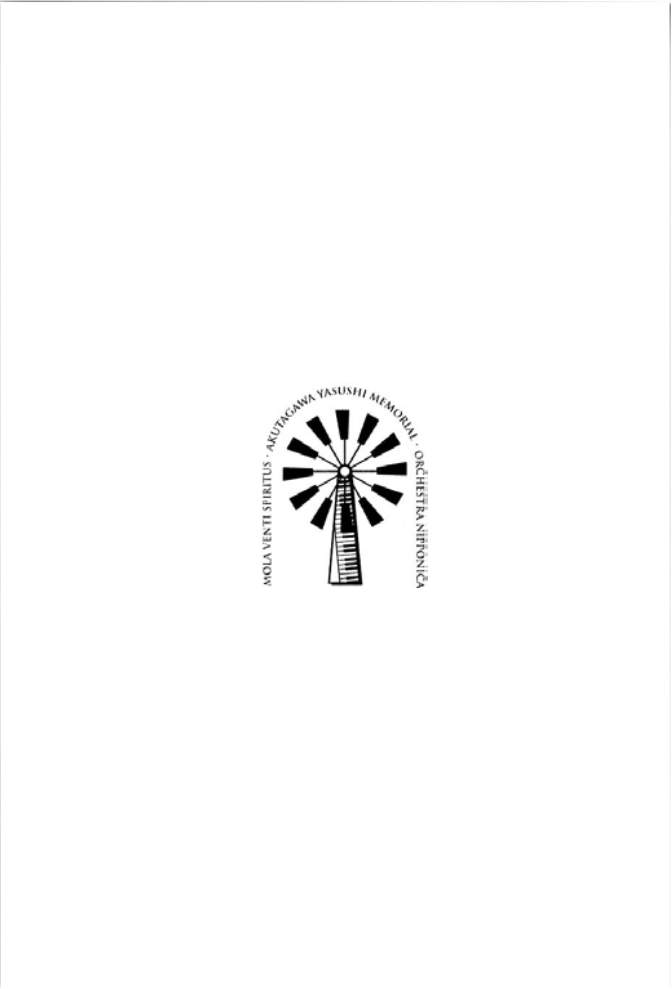
安部幸明の略歴と主な作品

作曲家・安部幸明は、広島県広島市中区白島九軒町に生まれた。軍人であった父の転勤のため、小学校は、東京中野、下関、徳島、松戸と転校した。東京府立第七中学校（現・都立隅田川高等学校）に進学し、中学4年で音楽を志した。東京音楽学校（現・東京藝術大学）本科器楽部チェロ専攻に入学し、本科を卒業後は、さらに研究科に進学して三年間作曲を学んだ。在学中に「弦楽四重奏曲第一番」（1935）を作曲し、同時に初演されている。安部は、生涯に15曲の弦楽四重奏曲を作曲している。25歳で研究科を卒業し、卒業作品として「オーケストラのための小組曲」（1936）を作曲したが、この作品は作曲の師であるK. プリングスハイム（1883～1972）によって上海と東京で、初演及び国内初演された。

その後、小田原中学校や府立第四中学校（現・都立戸山高高等学校）で教師をしながら作曲を続けたが、海軍に召集された。軍隊に限らず、戦時中の体験の記述を読むと、生涯許がたい思いであったようである。敗戦後は、アーニー・パイル劇場（1945年、占領軍である連合国軍最高司令官総司令部が東京宝塚劇場を接収した際に改名された）で、作曲編曲の仕事をした他、音楽放送の指揮、劇伴奏の作曲などで、糊口をしのいだ。1948年に、宮内庁楽部洋楽指揮者に就任し、6年間務めた。1949年には、平尾貴四男（1907～1953）、高田三郎（1913～2000）、貴島清彦（1917～1998）らと「地人会」を結成して、室内楽作品を中心に発表会を開いた。

この間に作曲されて、現在でも演奏される作品には「クラリネット五重奏曲」（1946）、「弦楽四重奏曲第七番」（1950）、「アルトサキソフォンとピアノのため嬉遊曲」（1951）などがある。特に、「弦楽四重奏曲第七番」には巖本真理弦楽四重奏団（1964～1979注:定期演奏会は1967～）の優れた録音が残されている。

1953年、安部は広島のエリザベト音楽短期大学（現エリザベト音楽大学）の設立に伴い、教授に招聘された。安部が生



写真提供：安部恵子

まれた場所は、第二次世界大戦で原子爆弾が投下された爆心地から、直線距離にして二キロメートルほどのところであり、招聘された安部は後年「行くべきだ、という気になった。」と語っている。同時に、設立間もないNHK広島中央放送局の広島放送管弦楽団、広島放送合唱団の指揮活動をおこなった。

因みに、広島市を本拠地として、中国地方を代表するプロフェッショナル・オーケストラである広島交響楽団は、最近、安部の作品を連続的に取り上げている。2013年の創立50周年記念特別演奏会に音楽監督・秋山和慶（1941～）の指揮で、安部幸明の「アルトサキソフォンとオーケストラのための嬉遊曲」（1960＝アルトサキソフォンとピアノのための嬉遊曲（1951）の管弦楽版）、及び「交響曲第一番」（1957）を、前年2012年にはプレ50周年として、広島生まれの指揮者、山下一史（1961～）の指揮で「シンフォニエッタ」（1964）を演奏している。

1954年秋に安部は、京都市立音楽短期大学に奉職する。この大学は、1969年に4年制の京都市立芸術大学となり、初代音楽学部長に就任し、1977年に定年となった。

広島時代から、京都での定年を迎える間の作曲活動は、管弦楽作品が中心となった。ライフワークであった弦楽四重奏曲は、「八番」（1952）、「九番」（1956）の二作品のみである。一方で、管弦楽作品の作曲活動はめざましく、1957年の「交響曲第一番」は、文部省（文部科学省）芸術選奨、文部大臣賞、毎日音楽賞を同時受賞している。1960年には、「アルトサキソフォンとピアノのため嬉遊曲」をオーケストラ版に編曲し好評を得、同年、「交響曲第二番」は芸術祭奨励賞を受賞した。1963年

には「オーケストラのためのセレナーデ」を放送（TBS）初演し、翌1964年には日本フィルハーモニー交響楽团委嘱シリーズ第13作として「シンフォニエッタ」が作曲された。「シンフォニエッタ」は、指揮者アルヴィド・ヤンソンス（1914～1984）によってレニングラード・フィルハーモニー交響楽団の定期演奏会で演奏された。

これらの作品のうち、「アルトサキソフォンとオーケストラの為の嬉遊曲」、「交響曲第一番」、「シンフォニエッタ」は、NAXOS日本作曲家選輯シリーズとして2007年に発売されて、作品を聴くことができる。

1977年に、京都市芸術大学を退職した後は、広島文化女子短期大学音楽科で教鞭をとった。以降1992年までの15年間に、「弦楽四重奏曲第10番」から「15番」までを作曲した。

安部幸明の作曲姿勢

1976年1月26日、安部幸明が64歳の時に、東京・豊島区民センターで開催された日本音楽舞踊会議・日本の作曲ゼミナール（1975～1978）安部幸明特集の会で、彼はこうに話している。「だいたい、私の音楽というのはわかりがよろしいんで、特に説明を要するものじゃないと思うんです。」

続けて司会者が「“音楽は音で語るべきで言葉で語るべきものではない。”というのが先生の特論であったように記憶しています。」と紹介している。（「作曲家との対話」新日本出版社、1982年、p205）

“語らない”作曲家が、おそらく唯一、自分の生立ちと音楽的作風について語った「自伝」がある。「さて私の作風だが、調性があることはいうまでもない。それに三楽章、あるいは四楽章から成る古典的なソナタの形の曲を作ることを好んだ。ということは西洋音楽の70％は速度の速いもの、またそれに舞曲的なものだということで、私はアレグロを書くのを最も好むということだ。歌曲が少ないのもこれに由来しているかもしれない。実は、緩徐楽章を作るのをいちばん苦手としている。苦手というか、好まないといった方がよいかもしれない。それは思想的なこと、社会問題などを背後にしてということである。そのようなことをバックにした作品を得意とする作家もいるが、私には向かないと思っている。」（「現代日本の作曲家5 安部幸明」（クリティーク80編著、音楽の世界社、1997年、p9-67）この言葉は、安部の作品を語るときにまっさきに引用され、安部もまた様々なところで、調性、古典的、ソナタ、アレグロといった、彼の音楽を理解する鍵となる言葉を持って自己の音楽を語っている。

しかし、安部の語るとおり彼の音楽を、調性がある、古典的なソナタ形式を好む、アレグロを書くのを好む、という額面のとおりに受取ると肩透かしを食う。事は単純ではない。彼は明治時代の末期、44年に生まれた。一般社会にオーケストラや室内楽の活動はほとんどなく、何よりComposition（構成）という概念の下に作曲する音楽文化の伝統がない東アジアの日本に生れて、ヨーロッパの民族的、文化的、宗教的な理念と感性に育まれた西洋音楽の規範を用いて、自己の感覚に忠実な音楽を作る冒険に生涯をかけた作曲家のひとりであったのだから。

“進歩・発展する作曲技法”の時流にプロテストして、“古い作曲技法”を貫いて「耳から、美、醜、清、濁、喜、怒、哀、楽・・・の感情に訴える（安部の言葉）」作曲をした、安部幸明の管弦楽作品に耳を傾けていただきたい。



交響曲第二番 自筆スコアと冒頭部分

1952年4月 地人会
後列左から、貴島清彦、高田三郎、平尾貴四男、安部幸明
前列左から、小林福子、島岡譲 写真提供：日本近代音楽館

オーケストラのためのセレナーデ 1963 年

6曲から構成された、SERENADE と名づけられた作品。6曲を順に日本語で記せば、①小序曲、②行進曲、③子守唄、④スケルツォ、⑤夜想曲（ひとりごと）、⑥終曲、である。5曲目の夜想曲、すなわち Nocturne を「ひとりごと」としたのは作曲家自身である。夜想曲という言葉の自由な解釈。

1984 年 4 月の第 72 回広島交響楽団定期演奏会のプログラムに安部が執筆した解説を、前出の「現代日本の作曲家 5 安部幸明」から引用する。

この曲を作るに当り、それぞれの曲が若しバレエだったら、どんなおどりの場面になるだろうか、(全曲が何か筋書きを持って、つながっているわけではないが) そんなことをふと空想しながら作り上げた。従ってこの作品はバレエ的情趣を随所に漂わせているだろうと、思っている。(引用終り)

この作品は、1963 年 10 月に東京交響楽団によってTBSラジオから放送、初演された。1950 年代後半から1960 年代のラジオ各局は、クラシック音楽の創作支援に絶大な力を発揮していた。南から、毎日放送（大阪）、中部日本放送、TBS放送、文化放送、NHKが競うように、毎年管弦楽作品を委嘱して放送による初演を活発に行っていた。今では、まったく想像することすらできないが、この作品も、そうして生まれた数多い管弦楽作品のうちのひとつである。

しかし、当時TBSラジオと専属契約を結んでいた東京交響楽団は、この作品を演奏した二ヶ月後には、契約を打ち切りにされ、翌年三月には解散し、人一倍オーケストラに愛情を注ぎ責任感の強かった楽団長の橋本鑒三郎(1907～1964)が、自殺をする悲劇に見舞われた。

余談ではあるが、1965 年から定期演奏会を復活させた東京交響楽団は、定期演奏会の半数の回には必ず日本の管弦楽作品を演奏した。そして、これを統率して今の東京交響楽団の演奏の礎を築いたのが指揮者・秋山和慶（1941～）であり、彼が今秋に文化功労者として顕彰されたことは誠に慶賀の至りである。

因みに、今日のオーケストラ・ニッポニカの指揮者・鈴木秀美の指揮の師は、秋山和慶である。



オーケストラのためのセレナーデ
自筆スコアと冒頭部分



写真提供：日本近代音楽館

さて、テーマに戻ろう。セレナーデを作品の形式に採用した日本の作曲家は、大変に数が少ない。恐らくそれは、交響曲の形式よりも更に、西欧の伝統のイメージに作品が染まるからであろう。

セレナーデの定義をニュー・グローヴ音楽大辞典(第9巻 458頁 講談社 1994年)から引用してみる。

セレナード(ママ)の多楽章構造については10以下の楽章から成るという程度で、はっきりとは規定されず、モーツァルトのこのジャンルの作品をモデルにして議論されてきた。行進曲または行進曲風な楽章がしばしば楽章の初めまたは終りに、あるいはその両方に見られ、楽師たちの登場や退出に使われた。作品の中心部では、ソナタ・アレグロ型の楽章のあとに、2つの緩徐楽章と2つのまたは3つのメヌエットが交代し、時にはより速いテンポの楽章が挿入され、最後はプレストかアレグロ・モルトの楽章で締めくくられる。(引用終り)

安部のセレナーデという題名は何を意味するのであろうか。安部自身の説明のとおり、“ふと”、バレエを思い浮かべて作曲した、と素直には受取りがたい。安部は、文章や言葉で自分の作風を語っているようでいて、語りきつてはいない。当然である。安部自身の矜持が、“音楽は音で語るべきで言葉で語るべきものではない。”ということであったのだから。(安部に限らず、作曲家は皆そうであるのだと思う。例外もあるが。)

安部のセレナーデの形式だけを見て推測すると、意外な作品にたどりつく。モーツァルトの作品には、行進曲が入っており、メヌエットなどの踊りの曲も挿入されているが、子守唄や夜想曲の発想はなく、これはロマン派の発想である。だが、ブラームスやドヴォルジャークの「セレナーデ」では、小品集的な構想は薄まり、メヌエットやスケルツォなどの曲は含まれるが、純音楽的な多楽章形式の作品に変化している。思いつくのは、アルバン・ベルク(1885～1935)である。彼の「三つの小品(作品6)」(1914～1915)の構成が、①前奏曲、②輪舞、③行進曲であること。さらに注目すべきは、彼の歌劇「ヴォツェック」(1921)の第一幕の形式である。この歌劇は、三幕各五場の構成であり、第一幕の音楽形式は、バロック時代の古典組曲やその他古典時

代の諸形式を組合せていて、第一場：バロック時代の舞踊組曲、第二場：ラブソディー、第三場：行進曲と子守唄、第四場：パッサカリア、第五場：ロンド、となっている。案外、ベルクあたりに構成のヒントがあるのかもしれない。

しかし、安部の東京音楽学校（現・東京藝術大学）卒業作品であり、彼の二作目の管弦楽作品「Kleine Suite（小組曲）」（1936）の構成は、① Entrata、② Intermezzo、③ Scherzo、④ Marcia、であり、その萌芽は自作にあるとも言える。

1) Miniature Overture (小序曲)

再現部が短縮された小さなソナタ形式で、短い序奏とコーダを持つ。

提示部はふたつの主題が提示される。

トランペットによる、A - A - G is - A - C という動機がファンファーレのように四回繰返されて、華々しく始まる。中低弦とホルンが八分音符を刻む上に、金管楽器が G - G es、G - G es あるいは H - B、H - B と力強く上下する音型は、セレナーデ全曲に変容しながら現れる共通の動機である。簡素なこの動機は、「交響曲第二番」や「シンフォニエッタ」(1964 年)にも出現する、安部の重要なライト・モチーフのひとつ、“共通動機”である。

第一ヴァイオリンによって、ロ長調音階を颯爽と駆けあがる第一主題が提示される。前打音を伴って跳びはねるような第二主題が、第一ヴァイオリンによって奏されるのを、木琴が十六分音符の“共通動機”で飾る。且つ、第二主題の中には“共通動機”が、リズムを変えて隠されている。

2) March (行進曲)

行進曲の形式どおりに、トリオ部分を挟んだ三部形式に加えて、14小節のコードを持つ。

小太鼓のリズムに乗せて、ピッコロがh⁴の超高音を含む主題を提示する。主題には、今日初演される「交響的スケルツォ」の第一主題（譜例②）が部分として現れる。トリオの入る直前四小節間には、連続して、ヴァイオリンや木管楽器による“共通動機”が現れる。幾分ユーモラスな音楽的気分は安部ならではの、である。

3) Lullaby (子守唄)

「第一部：第一主題-第二主題」～「中間部」～「第二部：第二主題-第一主題」～「コーダ」の構成から成る、三部形式の楽章である。ハープによる短いカデンツァを挟んで、フルートにより第一主題が、ファゴットにより第二主題が奏される。各主題の伴奏音型や、ハープのカデンツァの前後のクラリネットやホルンの音型は、“共通動機”が用いられている。

また、第二主題の冒頭三小節は、安部の交響曲第二番第二楽章の主題冒頭三小節の音の構成と一緒であることを、指摘しておきたい。

4) Scherzo (スケルツォ)

いわゆるラテン音楽的な感覚と、和の感覚が混在する音楽。「A-A」～「A'-B-A'」～「B」～「コーダ」の構成から成る、三部形式の楽章である。“共通動機”は、A部分の最後二小節、及びA'の冒頭を始めとして木管楽器群に随時出現する。

5) Nocturne (Soliloquy) 夜想曲 (ひとりごと)

自由な形式の楽章。冒頭のフルートによる開始部分を始めとして、この楽章は終始「共通動機」が形を変えて奏される。その「共通動機」に薦のようにからまって、チェロの独奏が「ひとりごと」をつぶやく。

6) Finale (終曲)

この楽章は、セレナーデの形式の約束通りにプレストで、歌劇「ヴォツェック」の第一幕第五場と同じロンド形式であり、コード付き複合三部形式の楽章である。形式の内容は、「ABA'-CDC」～「BABA経過」～「ABA'-CDC」-「コード」である。「共通動機」は、C部とD部に出現して、コードに入ると第一楽章冒頭のトランペット主題が繰返され、華々しく終わる。

初演：1963年10月27日 TBS ラジオ放送、上田仁指揮 東京交響楽団
編成：3fl(pic 持替), 2ob(cor-i 持替), 2cl, 2fg, 4hrn, 2tp, 3tb, tim,
sd, bd, cym, tri, tamb, xyl, glo, celesta, hp, 独奏チェロ, 弦楽5部
使用楽譜：スコア&パート譜 日本近代音楽館

弦楽のためのピッコラシンフォニア 1984 年

この作品についても、作曲家の言葉を紹介しておきたい。

私の最も愛好する形式は、古典的なソナタ形式であり、この嗜好は作曲を始めた頃から今に至るまで変わることなく続いている。

この作品は四つの楽章で出来ているが、第一楽章と終楽章に、この形式を置き、3部歌謡形式による第二楽章と、スケルツォの第3楽章を囲んでいる。平易な作品であるので、各楽章の形式を示すこと位で充分で、特にこまかい解説を必要としないと思っているが、一言申しえると、第2楽章の旋律が、『中国地方の子守うた』を連想させるところがあるかもしれない。私はバイオリン(ママ)属の楽器を特に愛好するためか、弦楽四重奏曲を大分作ってきたが、弦楽オーケストラは初めてで、昨年の秋作ったピッコラシンフォニア、つまり小型シンフォニーである。(1985年11月、広島アカデミア合奏団演奏会プログラム掲載文。「現代日本の作曲家5 安部幸明」より)

「ピッコラシンフォニア」は、今日演奏する作品の中で最も新しい作品であり、安部の最後の管弦楽作品「シンフォニエッタ」を作曲してから20年を経過した後の作品である。だが、使われている動機や和声を見ると、生涯の共通素材に徹していることがわかる。素材を持たないのではなく、信念を持って好きな動機を使用し続けたのであろうと思う。五度の和音に付加音を添えた和声や、「交響的セレナーデ」や「交響曲第二番」にも現れる「共通動機」、五度や四度を半音だけずらせた音程の跳躍、半音への執着などが、その素材である。そして、各主題の



弦楽のためのピッコラシンフォニア 冒頭部分

大胆な素朴さは、技法は異なるが作曲家・小山清茂（1914 ～ 2009）や清瀬保二（1900 ～ 1981）の作品群と同じ、土の臭いや古い里山の風景を連想させるものがある。その素朴さは、作曲当時 74 歳に達した安部の作曲の筆の自由さであったかもしれない。ことに、第三楽章の経過部の、ほとんど音の遊びのような枯れた具合は、菅原明朗（1897 ～ 1988）の晩年の奔放な作風を思わせる。一方で、終楽章に込められたエネルギーは年齢を感じさせない。速いテンポの音楽を得意と語る、安部の面目躍如の音楽である。

第一楽章 Allegro con brio

作曲家が語っているとおり、ソナタ形式である。しかし、例えば、この楽章のふたつの主題の調性関係は古典音楽の決まり事に必ずしも従ってはいない。

序奏はなく冒頭から、譜例①の第一主題が第一ヴァイオリンに現れる。練習番号2の後、四小節目には「交響的スケルツォ」の主題動機（譜例②）が現れ、第一主題提示部が終わる練習番号3の前二小節には“共通動機”、及び「交響的スケルツォ」主題動機が奏されて、第二主題の提示部に入る。第二主題の二小節目には、「交響的スケルツォ」主題動機がリズムを変えてはめ込まれている。展開部の後、再現部の第一主題はp（ピアノ）の音量で再現される。20 小節間のコードはへ調の長三和音で静かに終わる。

第二楽章 Lento molto semplice

三部形式の楽章。冒頭、第二楽章のゆったりした主題が提示されるが、フリギア旋法の旋律に、五度音程付加4の和音の伴奏を付けられているため、日本音楽的な情緒が表現される。トリオ部の終り部分には、第一ヴァイオリンに約束の“共通動機”が現れる。最後は、冒頭の伴奏和音で消えていくかのように終わる。

第三楽章 Scherzo Allegro molto

緩い形式を採る三部形式に加えて、第四楽章への経過部を持つ構成の楽章。冒頭の五度音程に付加2の和声が、二楽章の開始に類似するが、主題は短三度と半音の組合せで始まり、楽章全体は半音階的動きに支配されている。

時々、短三度の動きを含んだ半音階的上昇音階スケールがクレッシェンドを伴って現れる。このスケールは、第一楽章に出てきた「交響的スケルツォ」主題動機の変容した音型と交互に組み合わせられて、奇妙な経過部を構成する。

第四楽章 Vivace assai

簡素なソナタ形式の楽章である。冒頭、第二楽章開始と同じ和音構成で始まる。主題も、D - A - G - Aのヨナ抜き長音階で典型的に俗謡的な主題であり、伴奏系はまったく同じ、五度音程に付加4の和音構成からできている。第一楽章、第二楽章、



第三楽章、それぞれの動機が使用されて、勿論“共通動機”も現れる。安部が最も好んだD音のユニゾンで終わる。

初演：1985 年 11 月広島、井上一清指揮　アカデミア合奏団
編成：弦楽 5 部
使用楽譜：スコア　日本作曲家協議会刊、パート譜　日本近代音楽館

オーケストラのための交響的スケルツォ 1939 年

中間部を挟んだ主部にコードが続く構成の、大きな三部形式の作品である。

22 歳から本格的に作曲を勉強し始めた安部の三作目の管弦楽作品で、今日まで演奏される機会がなかった唯一の作品である。この作品は、五度音程や民謡音階、リズムなどの作曲素材によって、日本的な感性を表出させる作品に仕上げられている。

日本的なスケルツォ、と言えばオーケストラ・ニッポニカが 2003 年に再発見した、橋本國彦（1904 ～ 1949）の「感傷的諧謔」（1928）を思い浮かべる。両作品は、作曲姿勢として非常に近いものを持っている。

スケルツォは三拍子系の音楽であるが、日本で三拍子系の音楽を多く作った作曲家は希少である。安部は三拍子系を好んだ。

オーケストラ・ニッポニカの設立に情熱を傾けた作曲家・石井眞木（1936 ～ 2003）は、2003 年のオーケストラ・ニッポニカの設立演奏会で「感傷的諧謔」を客席で聴いて、周囲に怒りをぶつけていた。西洋音楽の伝統的な作曲技法をもって、日本的な感覚のする音楽を書くことを、“前衛”を目指した石井は許せなかったのであろう。「あれじゃあ、ベートーヴェンのマネごとじゃあないか!!」と、当時解説を執筆した片山杜秀氏（1963 ～）に当り散らしていたことを良く覚えている。石井にとって否定すべき“過去”の音楽は、橋本の音楽であり、もしかすると安部の音楽であったかもしれない。

安部は最初から最後まで作曲の姿勢を変えなかったし、安部にとって、いわゆる“前衛”の音楽は、安部の音楽概念からは逸脱した音楽であった。これは、古いか、新しい、とかの問題ではない。また、安部は新古典主義的音楽を書いた作曲家、と定義されることが多い。音楽の姿はそれに近いが、作品の根っこにあるものは、はたしてそうなのだろうか、良く考えてみる必要がある。



オーケストラのための交響的スケルツォ 自筆スコアと冒頭部分

さて、安部の交響的スケルツォは八小節の短い序奏で始まる。冒頭は、H音が、譜例②の第一主題のリズムを刻み、更に2オクターヴ跳躍して五度下がる、大胆な動きを示す。これは、序奏が終わってこの作品の中核となる第一主題（譜例②）が提示されたのち、すぐに第一主題の展開に入る最初の部分の音楽の暗示をしている。

三小節目では、五度音程に付加4の和音の伴奏に乗って、木管楽器が民謡音階の下降する動機を交互に奏すると、ティンパニーが譜例②のリズムを刻んで、主部に入る。この部分の安部の書法は、「ピッコラシンフォニア」の第二楽章、第四楽章とまったく同じ作曲である。「ピッコラシンフォニア」が「交響的スケルツォ」と同じ、と言うべきであろうが。五度和音と、民謡音階で日本的な感覚を目指していることは明快である。安部が最後まで作曲の姿勢を変えなかった、と書いた理由をわかっていただけであろうか。

主部は、ソナタ形式を採用している。しかし、その内容はロマン主義的にゆるやかである。主部に入ると、フルートとオーボエが、譜例②の第一主題を提示する。主部五小節目に出てくる旋律、Fis－G－Fis－E－Fis－E－Cのような動きは、遙か 46 年後の「ピッコラシンフォニア」の第一楽章の動機や、第三楽章の経過部の動機につらなる。

直ぐに、第一主題による展開に入り、ヴァイオリンが、主題のリズム反復と五度跳躍の音型を二度くりかえして、H音に到達する。この後、揺れながら下降する民謡音階と、上昇する半音音階が構成する六小節フレーズを反復しながら、H音は順にA音、G音、Fis音まで徐々に降下し、更にフレーズを三小節に短縮し切迫しながら、E音、D音まで、音楽は雄大に下降する。

練習番号4の後、7小節目からティンパニーの主題リズムと譜例②の第一主題が確保される。

第二主題は、練習番号6に、オーボエのソロで提示される。第二主題は、第一主題の音型を内在している。第二主題の提示終わると、展開部に入る。第一主題と第二主題を組合せて進行すると、練習番号 12 で再現部に入る。

練習番号17で序奏の楽想が戻った後、トリオ部分に入る。チェロ奏者の作品にふさわしく、チェロの旋律で始まるトリオ部分のスコア（総譜）の景色は、一見ブラームスの作品に見える。トリオ部分が終わると、三小節の全休符の後、主部に戻る。

主部を繰返した後にコードに入る。開始と同じ、五度音程に付加4和音の弦楽器に乗った木管楽器による民謡音階の動機と、ティンパニーによる第一主題のリズムが、序奏の楽想を回想して終わる。

初演：2014 年 11 月 9 日紀尾井ホール、鈴木秀美指揮　オーケストラ・ニッポニカ
編成：pic, 2fl, 2ob, 2cl, 2fg, c-fg, 4hrn, 2tp, 3tb, tu, tim, cym, tri, glo, tiefe glocke, 弦楽 5 部
使用楽譜：スコア　日本近代音楽館、パート譜　オーケストラ・ニッポニカ（由谷一幾）作



交響曲第二番　1960 年

第一楽章 Allegro energico

作曲者が生涯好きな形式とした、ソナタ形式で書かれている。コントラバスがCのピッチカートを一音弾いて、チェロがH-Cを、そしてヴィオラとクラリネットが長三度で上下する音型のI度7の和音に乗って、ヴァイオリンによって第一主題（譜例③）が提示される。第一主題は、長三度、全音、半音を組合せた音階で、二度駆け上がる。駆け上がった頂点の音はCとEで、音程は長三度である。この最初の八小節に、この楽章の基本要素が集約されている。

この半音、全音、長三度の基本素材は、この楽章の中で徹底して適用されている。加えて、第二主題（譜例④）のように日本音楽の民謡音階が明確に現れる。この主題は、四拍目の十六分音符の動にきに起因して、どこかぎこちない感じが日本的情緒をさらに色濃くさせている。これらの音楽的素材の混在が、時に日本的でありながら、時に日本的な感覚からは遠いという不統一感をいだかせて、西洋の音楽に慣れた耳が幾分とまどうのは、安部にとって少し皮肉な結果を招いているかもしれない。だが、その不統一感こそは、今の日本の私たちの社会と生活そのものである。（安部はこのようにまわりくどく音楽について考えることを最も嫌った!!）

素材の使用のされ方を少し追ってみる。

半音階の使用は、第二主題（譜例④）に続く四小節間のフレーズの反音階進行が典型的である。全音階の使用は、練習番号6の前、第二主題が提示される十一小節前から四小節間の、言ってみればピョンコ節のリズムで下降するフレーズなど。

半音階と全音階と長三度による組合せの典型的なフレーズは、練習番号 22 の三小節前で展開部の終りを告げるブレーキのように突然出現する、八分音符の三連音符である。一小節目はすべての音が全音階で動く。これを三連音符単位としてみると、一つ目と三つ目の音の間隔はすべて長三度の構成でできている。二小節目はすべて半音階で下降する三連音符。さらに三小節目は、四分音符と二分音符が長三度でフレーズの最後となる。繰返すが、このように楽章は、基本素材の使用を徹底した堅固な構造を持っている。

さらに、これは第一楽章に限ったことではないのだが、例の“共通動機”が頻繁に現れる。練習番号1の五小節目からの三小節間、練習番号3から練習番号4までの間の殆どすべての小節、練習番号6から二小節間など、限がないくらいである。思いかえせば、この楽章の開始部分のチェロ、ヴィオラ、クラリネットの波打つ伴奏は、音程差は異なるものの“共通動機”の変形と言える。

再現部直前の練習番号 23 の三小節前には、トランペットと打楽器によって第三楽章の主題リズムが、二度提示される。そ

して楽章の最後は、開始部分に回帰したかのように、チェロ、コントラバスとファゴットがH - Cを四回繰返す上に、ヴァイオリンやホルンがCを四回弾いて終わる。

以下に、楽章の構成を示す。冒頭：提示部・第一主題の提示／練習番号7から:提示部・第二楽章の提示／練習番号12 から：展開部／練習番号23 から：再現部／練習番号38の五小節前から：終結部。

おそらくこの楽章は、安部の心の中で、ブラームスに捧げられているような気がするのである。この楽章の開始部分は、ブラームスの弦楽五重奏曲第二番（作品111）の開始部分の楽想を連想させる。ブラームスの冒頭でヴァイオリンとヴィオラが1度の和音を伴奏し、これに乗ったチェロが、四度と長三度の旋律で弾き始める部分のことだ。さらに終楽章では、ヴィオラが十六分音符で、H音とC i s音を二回上下してD音で止まる動機を三回くりかえす。この動機は、これまでの曲目説明でくどいほど指摘した、安部の“共通動機”と同じである。

第二楽章 Andante tranquillo

この楽章は、主題を様々に変奏する、変奏曲形式で書かれている。

中低弦楽器の四小節の前奏の後、主題（譜例⑤）がコールアングレによって提示される。主題は、二十小節に及ぶ。後半十小節間には、“共通動機”が二度現れる。後の変奏の素材は、主題に限られてはいない。

練習番号42から、第一変奏部となる。第一楽章第一主題（譜例③）が、十六分音符を三連音符で、付点二分音符がトレモロで現れる。その合間にオーボエやフルート群に第二楽章主題の一部分が変奏されて差し挟まれる。第一変奏部の中間、練習番号45番の前後では、ふたつの素材が重ねて変奏される。ひとつめは、“共通動機”が、フルートとオーボエ、第一ヴァイオリンで、ふたつめは、提示部最後、練習番号41にフルートによって奏されるA i sからGに降る半音階進行が、第二ヴァイオリンとヴィオラで奏される。

第二変奏部は、一転してAllegroとなる。木管楽器による前打音や、弦楽器の後拍のピッチカートで識別しにくいが、木琴が主題を三拍子四分音符で変奏する。

第三変奏部は、テンポをAndanteにもどして、二つの素材で変奏を構成する。ひとつめは、主題の十一小節目、及び十八、十九小節目の“共通動機”。ふたつめは、主題の五小節目の動機（譜例④の五小節目）である。

譜例⑤



譜例⑥



譜例⑦



第四変奏部は、ふたたびAllegroとなる。素材は、第三変奏部の素材と同じものを用いた、他の部よりも自由であり、同時に終楽章への動機予告を行っている。“共通動機”の使用は、そのままで。譜例④の五小節目の動機は、「逆行形」にして使用される。

この「逆行形」と、第一楽章の再現部直前のトランペットとティンパニーによる、十六分音符ふたつと八分音符のリズムが、終楽章の主題（譜例⑥）を形成することになる。

以下に、楽章の構成を示す。冒頭：主題の提示／練習番号42 から：第Ⅰ変奏／練習番号48 から：第Ⅱ変奏／練習番号51 から：第Ⅲ変奏／練習番号55 から：第Ⅳ変奏／練習番号66 から：主題再提示とコーダ。

第三楽章 Presto

第二楽章から途切れることなく、続けて第三楽章に入る。Prestoの速いテンポのソナタ形式のこの楽章が、最も安部幸明の音楽らしいかもしれない。

第二楽章から続く、十小節間の序奏の後に、第一主題（譜例⑥）が提示される。主題のフリギア調音階が、リズムと融合して日本的な感覚を醸し出す。第一主題の後半には、約束の“共通動機”が存在する。（譜例⑥の七、八小節目） シンプルに、リズム、音型が展開されて、練習番号74からフルートによって、伸びやかな第二主題（譜例⑦）が提示される。簡潔に快的に音楽は進行して、練習番号86では、第二楽章第二変奏部を回顧するような楽想も現れて、再現部は提示部と対照的にp（ピアノ）の小音量で始まる。

終結部でも、第二楽章第二変奏部の楽想を一瞬回顧して、最後はC音で終わる。

以下に、楽章の構成を示す。冒頭:序奏／練習番号68から:提示部・第一主題の提示／練習番号74から：提示部・第二楽章の提示／練習番号79から：展開部／練習番号89から：再現部／練習番号102から：終結部。

初演：1960年11月10日TBSラジオ放送、上田仁指揮　東京交響楽団
 舞台初演：1961年5月26日　日比谷公会堂、同上
 編成：pic, 2fl, 2ob, cor-i, 2cl, b-cl, 2fg, c-fg, 4hrn, 2tp, 3tb, tu, tim, sd, bd, cym, tri, xyl, glo, 弦楽5部
 使用楽譜：スコア&パート譜　日本近代音楽館

安部幸明＋ニッポニカ年譜

西暦（和暦）	安部幸明（1911-2006）	ニッポニカで演奏した作曲家たち　【ニッポニカの演奏会】
1887(明20)		信時潔生まれる。
1897(明30)		菅原明朗生まれる。
1899(明32)		宮原禎次生まれる。
1902(明35)		紙恭輔生まれる。
1903(明36)		伊藤昇、諸井三郎生まれる。
1904(明37)		橋本國彦、宅孝二生まれる。
1906(明39)		金井喜久子生まれる。
1907(明40)		深井史郎、大澤寿人、松平頼則、平尾貴四男生まれる。
1911(明44)	9/1 広島に生まれる	清水脩生まれる。
1912(大1)		山田和男生まれる。
1913(大2)		高田三郎生まれる。
1914(大3)		伊福部昭、早坂文雄生まれる。
1917(大6)	東京で小学校入学。下関、徳島、松戸と転校。	
1918(大7)		大栗裕生まれる。
1921(大10)		入野義朗生まれる。
1923(大12)	関東大震災を松戸で体験。	橋本國彦、東京音楽学校予科入学。唯是震一生まれる。
1924(大13)	東京府立第7中学入学。	眞鍋理一郎生まれる。
1925(大14)		芥川也寸志生まれる。
1927(昭2)		伊福部昭、独学で作曲の勉強を始める。
1928(昭3)		橋本國彦、荻野綾子のフランス歌曲に感銘を受け、「黴」「斑猫」「笛吹き女」「お菓子と娘」作曲。管弦楽「感傷的諧謔」。
1929(昭4)	東京音楽学校チェロ科入学。平井保三、H.ウェルクマイスターに師事。	深井史郎、東京高等音楽学院（現国立音楽大学）予科入学。近衛秀麿「フランス17世紀歌謡集」編曲。松村禎三、黛敏郎生まれる。
1930(昭5)		深井史郎、菅原明朗に師事。松平頼則、菅原明朗らと新興作曲家聯盟結成。伊藤昇「マドロスの悲哀への感覚」。武満徹、原田甫生まれる。
1931(昭6)	K.プリングスハイム来日、平井康三郎と共に和声のレッスンを受ける。	平尾貴四男渡仏。山田和男、東京音楽学校入学。林光、池野成、篠原眞生まれる。
1932(昭7)		山田和男、プリングスハイム指揮マーラー5番を聴き感銘を受ける。伊福部昭、北大林学実科入学、早坂文雄と出会う。
1933(昭8)	東京音楽学校本科器楽部（チェロ専攻）卒、研究科作曲部へ進む。	橋本國彦、東京音楽学校講師就任。タンスマン来日。伊福部昭「ピアノ組曲(日本組曲)」作曲。今井重幸、高井達雄生まれる。
1934(昭9)		橋本國彦、東京音楽学校助教授。深井史郎「5つのパロディ」放送初演。山田和男、レオ・シロタ、プリングスハイムに師事。伊福部昭、三浦淳史と早坂文雄らと新音楽聯盟結成。大澤寿人「交響曲第2番」。
1935(昭10)	東京音楽協会主催第4回オーディションで「弦楽四重奏曲イ長調」が採りあげられ作曲家デビュー。日本現代作曲家聯盟入会。	チェレプニン来日、チェレプニン賞に伊福部昭「日本狂詩曲」、松平頼則「バストラル」入選。大澤寿人「ピアノ協奏曲第2番」。早坂文雄「二つの讃歌への前奏曲」。平尾貴四男「古代讃歌」。諸井三郎「ソプラノのための二つの歌曲」。
1936(昭11)	「オーケストラのための主題と変奏曲」作曲者指揮で初演。「オーケストラのための小組曲」上海で初演。東京音楽学校研究科(作曲専攻)修了。	深井史郎「パロディ的な4楽章」。伊福部昭、チェレプニンのレッスンを受ける。諸井三郎「チェロ協奏曲」。大澤寿人「ピアノ協奏曲第3番」。石井眞木生まれる。
1937(昭12)	聯盟第4回作品発表演奏会で「弦楽四重奏曲第2番」発表。指揮法をJ.ローゼンシュトックに師事。小田原中学、府立4中の時間講師など（1944年まで）。	深井史郎、草野心平らとポム・クラブ結成。伊福部昭「土俗的三連画」。大澤寿人「交響曲第3番」。早坂文雄「古代の舞曲」。ワインガルトナー来日。
1938(昭13)	「チェロ協奏曲」ワインガルトナー賞1等入選。	新響邦人作品コンクールに平尾貴四男「隅田川」、山田和男「若者のうたへる歌」入選。
1939(昭14)	深井史郎、小倉朗、山田和男らと楽団プロメテ結成。「オーケストラのための交響的スケルツォ」「弦楽四重奏曲第3番」。	山田和男「交響的木曾」。松平頼則「南部民謡によるピアノとオーケストラのための変奏曲」。早坂文雄「海の若者」。菅原明朗「明石海峡」。
1940(昭15)	紀元2600年奉祝記念演奏会に出演。	信時潔「海道東征」、橋本國彦「交響曲二調」、深井史郎、バレエ「創造」。山田和男「交響組曲呪縛」。
1941(昭16)		深井史郎「大陸の歌」、早坂文雄「左方の舞と右方の舞」。山田和男、指揮者デビュー。芥川也寸志、音楽を志し井口基成、橋本國彦に師事。
1942(昭17)	日本音楽文化協会主催演奏会で「チェロ協奏曲」初演。「フルートとピアノのためのソナタ第1番」。	深井史郎「ジャワの唄声」。早坂文雄「讃頌祝典之樂」。宮原禎次「交響曲第4番」。宅孝二「ラブソディ・エスパニョラ」。
1943(昭18)	「弦楽四重奏曲第4番」初演日本弦楽四重奏団。	伊福部昭「交響譚詩」がビクター管弦楽曲懸賞一等。芥川也寸志、東京音楽学校予科入学。
1944(昭19)	召集を受け横須賀へ。海軍水兵として土浦郊外阿見へ。	日響定期で深井史郎「海原」他を山田和男指揮。芥川也寸志、東京音楽学校本科で橋本國彦、下総院一らに師事。紙恭輔「木琴と管弦楽のための協奏曲」。山田和男「おほむたから」。
1945(昭20)	敗戦。杉並の父の家へ。	平尾貴四男、召集。山田和男、ハルピンで伊福部昭「寒帯林」指揮。
1946(昭21)	アーニーパイル劇場の作曲編曲係となり「ミカド」の編曲など。NHKの劇伴、ラジオ歌謡等の作曲、指揮。再発足した日本現代音楽協会参加、「クラリネット五重奏曲」初演。	松平頼則、清瀬保二、早坂文雄ら「新作曲派協会」グループ結成。伊福部昭、東京音楽学校作曲科講師就任、芥川也寸志らが師事。藤田正典生まれる。

1947(昭 22)	「ピアノとオーケストラのためのパストラル」「弦楽四重奏曲第 5 番」放送初演 多久興弦楽四重奏団。	橋本國彦、古関裕而、深尾須磨子らと新歌謡運動をめざして「新風社」結成。
1948(昭 23)	宮内庁楽部洋楽指揮者を務める（6 年間）。	橋本國彦「三つの和讃」初演（山田和男指揮、東宝交響楽団）。早坂文雄「ピアノ協奏曲」。
1949(昭 24)	平尾貴四男らと地人会結成、「弦楽四重奏曲第 6 番」ほか発表、多弦楽四重奏団。	深井史郎、交声曲「平和への祈り」山田和男指揮。清水脩「合唱曲 月光とピエロ」。橋本國彦没。
1950(昭 25)	「弦楽四重奏曲第 7 番」多弦楽四重奏団、「フルートとピアノのためのソナタ第 2 番」初演。	諸井三郎「交響曲第 3 番」山田一雄指揮初演。芥川也寸志、「交響管弦楽のための音楽」HNK 懸賞特選。早坂文雄、映画音楽「羅生門」。大澤寿人「トランペット協奏曲」。伊福部昭「プロメテの火」。
1951(昭 26)	「アルト・サクソフォーンとピアノの為の喜遊曲」地人会で発表。	松平頼則、日本現代音楽協会（現音）常任委員。平尾貴四男「平和への序曲」山田和男指揮。清水脩「交響曲第 1 番」。
1952(昭 27)		深井史郎、神秘的組曲「マイクrofフォンのための音楽」、芥川也寸志「マイクrofフォンのためのファンタジー」。
1953(昭 28)	広島エリザベト音楽短期大学教授。広島中央放送局の管弦楽団、合唱団の指揮。	深井史郎、バレエ「月光とピエロ」。林光「交響曲ト調」。池野成「ダンス・コンセルタンテ」。篠原眞「ロンド」。山田和男、東京芸大常勤講師。伊福部昭、東京芸大講師辞任。平尾貴四男、大澤寿人没。
1954(昭 29)	秋より京都市立音楽短期大学へ移る。	伊福部昭「シンフォニア・タブカーラ」。芥川也寸志、東欧ソ連中国旅行。唯是震一「箏とオーケストラのためのカプリチオ」。
1955(昭 30)	「弦楽四重奏曲第 8 番」プロ・ムジカ弦楽四重奏団、「9 楽器のための喜遊曲」地人会で発表。	深井史郎、清瀬保二らと日本映画音楽協会設立。芥川也寸志「交響曲第 1 番」初演。宅孝二「ロンド・カプリチオーソ」。清水脩「交響曲第 2 番」。早坂文雄没。
1956(昭 31)	富樫康『日本の作曲家』の 1 項目に掲載。「弦楽四重奏曲第 9 番」ラモー弦楽四重奏団。	深井史郎「架空のバレエのための三楽章」初演。芥川也寸志、新交響楽団創立。大栗裕「大阪俗謡による幻想曲」。
1957(昭 32)	東京交響楽团委嘱の「交響曲（第 1 番）」初演斎藤秀雄指揮東響、第 8 回毎日音楽賞、昭和 32 年度芸術選奨受賞。	伊福部昭「アイヌの叙事詩に依る対話対牧歌」初演。芥川也寸志「双子の星」放送初演。
1958(昭 33)	ブリヂストン美術館「作曲家の個展」第 22 回安部幸明（山根銀二）開かれる。	松平頼則「左舞」。芥川也寸志、3 人の会で「エローラ交響曲」初演。石井眞木「交響的協奏曲」。武満徹「ソリチュード・ソノール」。
1959(昭 34)		深井史郎没。
1960(昭 35)	日本現代音楽協会委員長（63 年まで）。TBS で「交響曲第 2 番」放送初演、昭和 35 年度芸術祭奨励賞受賞。ソ連作曲家同盟招待で清瀬保二と外遊。「六重奏曲」。	芥川也寸志、オペラ「暗い鏡」放送初演。清水脩「交響曲第 3 番」。
1961(昭 36)	「交響曲第 2 番」舞台初演。	松平頼則「オーケストラの為の舞楽」。伊福部昭「ピアノと管弦楽のためのリトミカ・オスティナータ」。
1962(昭 37)	第 5 回日本の作曲家研究会（安部幸明・高田三郎）開かれる。	和田薫生まれる。
1963(昭 38)	「オーケストラのためのセレナーデ」上田仁指揮東響。	高井達雄「鉄腕アトム」。清水脩「オリンピック賛歌」。
1964(昭 39)		NHK・TV 大河ドラマ「赤穂浪士」開始、芥川也寸志音楽担当（～同年 12 月 27 日）。
1965(昭 40)	日フィル委嘱「シンフォニエッタ」初演。	信時潔没。
1966(昭 41)		松平頼則、上野学園大学教授就任。山田和男、東京芸大助教授。
1967(昭 42)	「シンフォニエッタ」レニングラード響定演で演奏、外遊。	芥川也寸志、「暗い鏡」改作のオペラ「ヒロシマのオルフェ」TV 初演。武満徹「ノヴェンバー・ステップス」。
1968(昭 43)		菅原明朗「交響的幻影イタリア」。山田和男、一雄に改名。
1969(昭 44)	京都市立芸術大学初代音楽学部長（5 年間）	芥川也寸志「チェロとオーケストラのためのコンチェルト・オスティナート」初演。
1970(昭 45)		大栗裕「オーケストラのための協奏曲」。間宮芳生「ピアノ協奏曲第 2 番」。
1971(昭 46)		「伊福部昭歌曲集」出版。
1972(昭 47)		山田一雄、東京芸大教授辞任。
1973(昭 48)		山田一雄、近衛秀麿追悼演奏会指揮。
1974(昭 49)		山田一雄、プリングスハイム追善演奏会指揮。伊福部昭、東京音楽大学作曲家教授。芥川也寸志「GX コンチェルト」。
1975(昭 50)		松村禎三「Pf 協奏曲」山田一雄指揮舞台初演。
1976(昭 51)	新交響楽団「日本の交響作品展」で「小組曲」演奏。	芥川也寸志、新交響楽団創立二十周年記念演奏会「日本の交響作品展」で、平尾貴四男「古代讃歌」、伊福部昭「交響譚詩」など戦前の日本人作品 10 曲を取り上げる。石井眞木「ブラック・インテンション I」。宮原禎次没。
1977(昭 52)	定年退職。広島文化女子短期大学音楽科に 5 年間務める。	別宮貞雄「交響曲 2 番」山田一雄指揮。芥川也寸志「映画音楽 八甲田山」。諸井三郎没。
1978(昭 53)		藤沢市民会館 10 周年記念「山田一雄の世界」演奏会。
1979(昭 54)		山田一雄、アマチュアオーケストラ新交響楽団でマーラー 5 番を指揮。
1980(昭 55)	「弦楽四重奏曲第 10 番」初演三戸康雄弦楽四重奏団。	伊福部昭「シンフォニア・タブカーラ」改訂版初演（芥川也寸志指揮新響）。入野義朗没。
1981(昭 56)	広島で古稀記念室内楽演奏会開催。	サントリー音楽財団「作曲家の個展・松平頼則」演奏会。紙基輔没。
1982(昭 57)		山田一雄、日本指揮者協会副会長。石井眞木「アフロ・コンチェルト」。大栗裕没。
1983(昭 58)	「弦楽四重奏曲第 11 番」ワシントン DC で初演。	サントリー音楽財団「作曲家の個展・山田耕筈」演奏会、山田一雄指揮。宅孝二没。
1984(昭 59)	弦楽合奏曲「ピッコラシンフォニア」。	芥川也寸志、「伊福部昭・交響コンサート」のために、伊福部昭「アイ・アイ・ゴムテイラ（ギリヤーク族の古き吟誦歌第 2 曲）」管弦楽版編曲、発表、指揮。

1985(昭 60)	「ピッコラシンフォニア」広島初演。勲三等瑞宝章受章。	伊福部昭、東京音楽大学民族音楽研究所所長に就任。「ヴァイオリンとピアノのためのソナタ」初演。
1986(昭 61)		芥川也寸志、サントリーホール落成式典で、委嘱作「オルガンとオーケストラのための＜響＞」初演。清水脩、金井喜久子没。
1987(昭 62)		日本近代音楽館発足、芥川也寸志は運営委員、事業委員に就任。旧東京音楽学校奏楽堂、上野公園に移築開館。
1988(昭 63)		山田一雄、團伊久磨交響曲全集収録。菅原明朗没。
1989(平 1)	奏楽堂「近代日本の室内楽」で「弦楽四重奏曲第 2 番」演奏。「弦楽四重奏曲第 12 番」植木三郎弦楽四重奏団。	伊福部昭「交響頌偈 釈迦」初演。石井眞木「浮游する風」。芥川也寸志没。
1990(平 2)		山田一雄、新星日響ヨーロッパ公演指揮。都響「日本の作曲家シリーズ 伊福部昭」開催。
1991(平 3)	現音展で「フルート・ソナタ」演奏。「弦楽四重奏曲第 14 番」イソ弦楽四重奏団。	サントリー「作曲家の個展 ’91 伊福部昭」で「管弦楽のための日本組曲」初演。石井眞木「ピアノ曲・北・銀・夜（冬）」「テノール・リコーダー曲・東・緑・春」。山田一雄没。
1992(平 4)	「弦楽四重奏曲第 15 番」ベルリン四重奏団により初演。	石井眞木「打楽器協奏曲・南・火・夏」「弦楽四重奏曲・西・金・秋」。
1993(平 5)		伊福部昭「交響的音画 釧路湿原」放送初演。伊藤昇、原田甫没。
1994(平 6)		伊福部昭「因幡万葉の歌五首」初演。
1995(平 7)		松平頼則「三つのオルドル II」。
1996(平 8)		武満徹没。
1997(平 9)	クリティーク 80 編著『安部幸明』音楽の世界社より発行。	黛敏郎没。
1998(平 10)		伊福部昭「絃楽オーケストラのための日本組曲」初演。
1999(平 11)		伊福部昭、二十五絃箏曲「琵琶行」初演。
2000(平 12)		石井眞木、室内オペラ「閉じられた舟」日生劇場公演。高田三郎没。
2001(平 13)		石井眞木「人間如夢 III」Op.121。松平頼則没。
2002(平 14)		伊福部昭米寿記念コンサート。
2003(平 15)		【ニッポニカ設立演奏会 1、2】石井眞木没。
2004(平 16)		【伊福部昭文化功労者顕彰お祝いコンサート】【古楽同源・新楽共創 in 東京 / 北京】池野成没。
2005(平 17)		【昭和 9 年の交響曲 1、2】早坂文雄 / 池辺晋一郎「七人の侍ファンタジー」。
2006(平 18)	12/28 没。	【大澤寿人作品展】【早坂文雄作品展】伊福部昭没。
2007(平 19)		【深井史郎作品展】【古楽同源・新楽共創 in ハノイ】松村禎三没。
2008(平 20)		【東京交響楽団の 1950 年代演奏会】
2009(平 21)		【芥川也寸志作品展その 1、その 2】藤田正典没。
2010(平 22)		【芥川也寸志作品展その 3】【日本近代音楽館へのオマージュ演奏会】
2011(平 23)		【山田一雄没後 20 周年記念演奏会】三木稔没。
2012(平 24)		【大阪生まれの作曲家たち演奏会】林光没。
2013(平 25)		【古楽同源・新楽共創 in マニラ】【石井眞木へのオマージュ演奏会】【荻野綾子演奏会】
2014(平 26)		今井重幸没。【チェレブニン・伊福部・池野演奏会】【安部幸明交響作品展】
	出典：クリティーク 80 編著『安部幸明』（音楽の世界社、1997）他	出典：オーケストラ・ニッポニカ演奏会プログラム、『フィルハーモニー』53 巻 9 号「現代日本の管弦楽作品表 1912～1980」他

「東京音楽大学付属図書館ニッポニカ・アーカイヴ」開設のお知らせ

このたびオーケストラ・ニッポニカでは、これまでの演奏会で使用した楽譜を東京音楽大学付属図書館に寄託し、同図書館ではそれを受けて「東京音楽大学付属図書館ニッポニカ・アーカイヴ」を開設、運用を開始することとなりました。

今後、ニッポニカでは演奏会で使用した楽譜を順次寄託し、アーカイヴのコレクションに加えて参ります。コレクションの内容や貸出手続きなどの詳細は、同大学図書館の下記ウェブサイトに掲載されておりますのでご参照ください。多くのみなさまにご利用いただくことで、日本人管弦楽作品の演奏を重ねていただければ幸いです。

東京音楽大学付属図書館ニッポニカ・アーカイヴ・コレクション
<http://tokyo-ondai-lib.jp/collection/nipponica/>
（2014 年 11 月 10 日公開予定）